

小

小さな花壇だから、植えられる種類も数もうんとしぼりこまなければならぬ。両親が隙間があれば何でも移植していた結果を見て、すべてかたづけられる気になったのだから、ここで欲にかられて拡大志向に走っては元の木阿弥だ。でも、片手で隠してしまえそうなハーブと小花を少し並べただけで心華やぎ、ちよつと丈のある木をとなりに置きたくなってしまう。両親が大切にしていた地植え鉢植え盆栽、一切選別せず処分した実績から言って、ぼくには植物全般ことに樹木に関しては知識も思い入れもまるでないのだが、スープに登場するオリーブと月桂樹ならば利用価値がありそうだ。かたづけをしてもらった業者に聞いてみると、それなら入手できる、という返事だった。

結果的に二つの苗木をプレゼントとして受け取ることなつた。どちらも思いのほか大きく、ぼくの背丈ほどもあった。うれしくもあつたし、業者の厚意にも感謝したく、すぐに園芸店に赴いて必要なものをそろえることにした。何が必要かわからないのだが。

「日当たりのいいところに置いてくださいね。」  
「エプロンにジーンズの女性店員が朗らかに言う。ならば花壇は不向きだな。鉢植えにするほかない。」  
「鉢だったら、これぐらいはほしいですね。」

一抱えもある大きな鉢だ。じゃあそれを二つ。「水やりですか。それは毎日です。夏になったら朝夕二回やってください。底から水が流れるくらいたっぷり。」

店員は事もなげに快活な調子で言うのだが、ここでぼくの胸にどのような思いが去来したのか彼女は当然ながら知るよしもない。父が亡くなったから、盆栽の水やりに通うのが苦痛だった。雨が降ればほつとした。何度かサボった。枯死寸前に追い込んだ鉢もあった。ぼくが水をやるのが不満なんだろう、と葉の変色した盆栽に毒づいた。そんなことからすべてかたづいたときは、罪悪感を覚えながらもほつとした。それが父の一周忌を終えたこの春より、何の因果か毎日、夏は朝夕二回、水やりに通う羽目になった。ところがそれが少しも苦痛でない。あの世で両親は苦笑しているだろう。いや、たぶん呆れている。

「いそいそと通ってくーわ。自分が世話しちゃうやっちゃかわいいさで。」

草木それぞれと紡いだ物語のあるなしで眼差しがまるで異なつてくることに自分で驚く。これは自戒が必要だ。楽しいからと手を広げまい。自分で世話ができないとなつたら処分、それまでの関係と割り切るべし。そしてそう考えたことを覚えておくこと。

2022.5.2

夕焼け通信 1349号

〒690-0823 島根県松江市西川津町4276-B402 gosuitei.sakura.ne.jp/yuyake/ 編集 宮森健次

専業ババ奮闘記(その2) 96

## 木幡智恵美

整理 (3)

まずは、義母の部屋に続く廊下の左側から取り掛かる。仏間経由で入っていた義母の部屋には、廊下を左に折れたところに開き戸があり、そこが正式な出入口口だった。ところがそこが封鎖されていたのだ。畳一畳分ほどのスペースにはスチール製本棚が二つ置かれ、食器類やタッパーなどがぎっしり並んでいる。その前に置いてあるバケツや籠類を退け、本棚の物を下ろしていく。缶に入った米、粉類、容器に入ったままの醤油や酢もある。全部賞味期限は十年くらい前。前回の整理で撤去済みだが、庭側の廊下には小さい冷蔵庫、その上に炊飯器もあつた。九十歳過ぎまで、自分で材料を買って、食べたものを調理していたのだ。まだ使えそうなものは台所へ運び、使うことはないだろうと思うものは、燃えるゴミの袋とプラゴミの袋、ガラス瓶を入れる袋へと分けて入れていく。すぐに一杯になった。空っぽになった本棚は使えそうなので、奇麗に拭き、二階の娘の部屋に持って上がる。孫たちがうちに来ると、よく娘の部屋に遊びに入る。本棚に絵本や図鑑を並べておくと、寛大や実歩、そのうち宗矢も手に取って開いてみるだろう。こんなふうにしていくと、義母の部屋整理が、いろいろな範囲に派生していきそうだ。ま、この際、一気にやってみようか。

朝のうちに点訳、そのあと午前一杯片付け、昼食後は休憩して歩きに出、また片付けという日が続いた。廊下の突き当りを終えると、押し入れにかかる。アルバムなど写真類がたくさん出てきた。写真となると、あれこれ迷いそうだから、全部箱に入れて、夫に任せることにする。さらに、日記も何冊か出てきて、その間に薄い冊子が混じっていた。母子会の何十年かの記念誌だ。活動的な義母は、あれこれの会に所属し、母子会の役員はかなりの期間やっていた。目次を見て義母の名前があるページを開いて読み始める。まだ三人の子育てに奔走している頃のこと、「智恵美さん、お願いがあるけど」と義母が切り出したのが、この原稿だった。「言いたいことは頭にあるけど、書けと言われるとね」。そこで、頭にあることをメモにしてみよう、それをつなげたり、聞き足したりしながら文章にまとめた。言わば、義母と私の合作だ。片づけをしながら、過去へ宝探しに出かけているような気持ちになった。

30代フリーター やあ、ジイさん。ロシアのウクライナ侵略を「古い戦争」と指摘するコメントをいくつか読んだ。年金生活者 核を使うかもしれないとほめかすロシアの脅しにその「古さ」が象徴的にあらわれている。

30代 「古い戦争」との指摘には次のようなものがあつた。

「ロシアの侵略戦争は、ハイテク戦争という大方の専門家の見方を裏切り、精密誘導ミサイルを使わない大胆な無差別爆撃で多くの死傷者が出るという古い形の戦争となつている」(細谷雄一)

「今、ロシアとウクライナがやつてゐる戦争は、第2次世界大戦とそう種類の変わらない戦争です」(塩崎悠輝)

「21世紀でも古い戦争が起きうるのであり、兵力と士気といった要素を含め考えなければいけないだろう」(小泉悠)

年金 第2次世界大戦を最後に「熱い戦争」から「冷たい戦争」に移つた世界の戦争の「本流」に逆らつて、すでに「傍流」となつた「古い戦争」を口

30代 自民党の安全保障調査会は、敵のミサイル拠点をたたく「敵基地攻撃能力」を「反撃能力」と名称を変えたうえで保有するよう求める提言を首相に提出した、と報じられている(4月28日朝日新聞朝刊)。日本の防衛戦略の基本方針である「専守防衛」に反する疑いが持たれている。

年金 「専守防衛」のもとになつてゐる憲法9条は「古い戦争」ばかりでなく「新しい戦争」も否定する非戦・非武装の理念を掲げる。それは戦争をめぐる世界で最も「新しい」理念といふことができる。その「新しさ」を手離すようなことがあれば、「古い戦争」をますますのさばらせることになるだろう。

30代 安倍晋三がプーチンを戦国武将にたとえて「非常に合理主義者で、基本的には力の信奉者」と評し、「織田信長に人権を守れと言つても全然通用しない」と語つた、と報じられている。

年金 27回も会談し、「君と僕は同じ

シアが始めたことをそれらは語つてゐる。その「古さ」は無差別殺戮や残虐行為だけにあるのではない。戦争を「冷たい」ものにしてゐる核を「抑止力」としてだけではなく、「威嚇力」「破壊力」としても使うことを排除しないロシアの態度を指している。

30代 「古い戦争」が「傍流」とはいえ残存しているのはなぜなんだ。

年金 この地球上に「古い世界」が残つてゐるからだ。それは前近代を引きずる世界であり、政治体制としては非民主主義の国々を指す。そこでは建前は別として、戦争を違法とする民主主義諸国の価値観は根づいていない。ロシアもそうした非民主主義国のひとつだ。

非民主主義国は国の数でも人口でも民主主義国を上回る。民主主義国の国民は、民主化すれば豊かになれるのに、と思ふかもしれない。だが、現在の非民主主義国が今すべて民主化したと仮定すれば、それらの国々の財政はたちまち破綻し、国家としての機能を果たせなくなるだろう。社会は不安定

未来を見てゐる」と語りかけた相手だから、この期に及んでも「絶賛」しているのか、と皮肉のひとつも言いたくなるが、実は安倍自身は本気でプーチンを尊敬しているのかもしれない。

わが元首相がプーチンを日本で英雄視されている歴史上の人物にたとえた

になり、反乱やテロも起きるかもしれない。

民主化した国では人権が保障される。国民は生存権を主張し、生活に窮したら政府に救済を求めるだろう。この間まで非民主主義国だった国々は民主的な先進諸国と違つて経済的に豊かではない。国民の要求に応じられるだけの財力は無い。

30代 非民主主義の大国である中国は世界第2位のGDPを誇つていて豊かに見える。

年金 ひとりあたりのGDPは先進国にはるかに及ばない。民主化されて、個人の権利が尊重されるようになったら、やはり同じようなことが起きる。

「古い世界」が、民主的な先進諸国と並んで、いまなお強固に残存している理由をひと言で言えば、富の稀少性が依然として人類を支配していることだ。資本主義の高度化とテクノロジの発達で先進諸国を中心に稀少性の縮減が急速に進んでいるが、地球全体に及ぶところまでは達していない。

理由を推測すると、①かつて「蜜月」関係にあつた相手を侵略者として急にこき下ろすと、「変節」とか「手のひら返し」とか言われかねない②せつかく税金を注ぎ込んで築いたパイプなので、今後もつないでおけば、役に立つときが来るかもしれない③強権的な体質が似かよつていてケミストリーが合う、といったことが考えられる。

安倍晋三を支持する右派勢力が、現在の価値基準で過去を裁いてはならないとして、日本の侵略戦争を正当化するのを目にすることがある。「織田信長に人権を守れと言つても全然通用しない」と語る安倍は、逆に信長が生きた過去の価値基準で現在のプーチンを正当化していると言つてゐる。

それは安倍自身がおのれを正当化しているということでもある。「専守防衛」に反する「敵基地攻撃能力」の保有を先頭に立つて主張し、非戦・非武装の憲法9条の「新しさ」にあらがう彼の姿は「古い戦争」を正当化する振る舞いと言わなければならない。

ニュース日記 828  
中村 礼治

## ロシアの「古い戦争」